

# 海外派遣事業報告書 2015

ベトナム・インドネシア



公益社団法人

北海道国際交流・協力総合センター

## 目次

研修事業概要	1
アルバム	2
参加者レポート	4
海外派遣研修団名簿	19
スケジュール	20
行動記録	21

# 海外派遣事業報告書 2015

## ベトナム・インドネシア

### 1 趣旨

道内各地の青年を海外に派遣し、視察や関係者との意見交換などを通じて、本道との違いや地域社会のあり方などについて学ぶとともに、異文化や国際交流等に対する理解を深め、国際的な視点に立って地域づくりを進める人材を養成し、地域の国際化の促進に資する。

### 2 訪問国

ベトナム、インドネシア

### 3 派遣対象者

北海道の青年(20～45歳程度)

### 4 研修内容

国際協力の実態と効果的な協力事業のあり方や、経済交流や異文化交流について学ぶ機会とする。

- ・JICA 事業の取り組み(ベトナム、インドネシア)
- ・NGO 等の活動状況(ベトナム)
- ・経済交流の取り組み(インドネシア)
- ・青年交流(ベトナム、インドネシア)

### 5 派遣計画

- ・訪問先 :ベトナム、インドネシア
- ・派遣人員 :7名(団長1名、団員6名)
- ・派遣期間 :平成27年11月1日(日)～11月8日(日)8日間

### 6 参加負担金

11万5千円

### 7 旅行主催

株式会社わくわくホリデー



JICAベトナム事務所にて酒井所長よりベトナムの現状と経済発展の歩みについてレクチャーを受けた。



ベトナム日本人材協力センター(VJCC)を訪問し、若林専門家より、ベトナムでの人材育成について説明を受けた。

ベトナム  
11月1日～11月4日



ストリートチルドレン友の会(FFSC)を訪問し、子ども支援の取り組みについて説明を受けた。



FFSCの子どもたちと日本文化交流のひとつ、北海子ども盆踊り「シャンゴ」を一緒に踊った。



ベトナム戦争での枯れ葉剤の影響で障害が残る人々が入院しているツーザー病院を訪問した。

# インドネシア

11月4日～11月8日



JETROインドネシア事務所の春田シニアディレクターより、ハラル食やビジネス展開の状況などについて説明を受けた。



JABABEKA工業団地を訪問し、有本アドバイザー案内のもと、工業団地内にある大学、企業、介護施設などを訪問し、関係者から説明を受けた。



JICAインドネシア事務所を訪問し、荒津次長より、シジャカルタの現状やJICAの取り組みについて説明を受けた。



ダルマ・プルサダ大学を訪問し、現地の学生に対して北海道の文化に関するプレゼンや、北海盆踊りを紹介した。



ダルマ・プルサダ大学の学生とのグループ交流。

## 平成 27 年度海外派遣研修でみたこと、聞いたこと(現地報告)

海外派遣団 団長

北海道国際交流・協力総合センター〈HIECC〉事務局長 石井 博美

HIECC で毎年実施している「海外派遣研修事業」に参加し、ベトナム、インドネシアを訪問する機会を得たので、現地で見聞きしたことの一部を報告する。

### <歩きたくなる街：ホーチミン>

ベトナム社会主義共和国は、中国、ラオス、カンボジアと国境を接する南北に細長い国で、北のハノイ市から南のホーチミン市まで 1,700 キロの距離があり、鉄道ではなんと 30 時間を要するとのこと。気候や住民の気質も地方で異なる。

首都ハノイ市を中心とする北部は地理的に中国との関係が深く、辛抱強い性格だと。中部はダナン市を中心とする山間部で、平野部が少ない厳しい環境のため貧しく質素節約型。今回訪れたホーチミン市を中心とする南部は、ラオス、タイ、カンボジアと続く大河川メコン河が南シナ海にそそぐ、「メコンデルタ」と呼ばれる自然に恵まれた肥沃な農作地帯を含み、楽天的でおおらか。国土の面積は日本の 9 割程度で、人口はインドネシア、フィリピンに次いでアセアン諸国で第 3 位。15 歳未満の人口が日本より 2 割以上多く、65 歳以上の人口は日本の 2 割以下、総人口の 4 割が 25 歳以下という若い国である。

タンソンニャット空港からホーチミン市中心部まで 10 キロ程度だが、日中はひどい交通渋滞で車で 1 時間以上かかる場合もあるとか。今回は空港を出たのが深夜 23 時を過ぎていたためか、スムーズに市内入りできた。

早朝目覚めて驚いたのは、ホテル前の通りを猛スピードで行き交うバイクの群れ。車は少数派で殆どが老若男女の運転する「ホンダ」。ここでは「ホンダ」がバイクの代名詞。自動車は 2 台に 1 台以上が「トヨタ」。日本企業の進出ぶりが目の当りにできる。

ベトナムは、共産党 1 党独裁の社会主義国でありながら、ベトナム戦争後、中越紛争などを経た 1986 年にいわゆる「ドイモイ」政策により市場を開放したことはよく知られている。市場経済の導入、価格の自由化などにより外資の導入を図ることで、経済成長政策を進めてきた。この点では中国に倣ったようだが、同時に役人の汚職、賄賂など負の部分(アンダーテーブル、裏経済)も取り入れた模様で、良くも悪くも「ネクストチャイナ」などと呼ばれることもある。

ホーチミン市中心部は交通渋滞が激しいが、若い人たちが行き交う活気があり、日本人ご用達のレタントン通りでは、「SUSHI BAR」などが賑わいをみせていた。ベトナムではビールに氷を入れて飲むようで、地元の「サイゴンビール」や「333」などが店頭で並ぶ。目抜き通りのドンコイ通りでは、ブランドショップが殆どを占める大型のショッピングモールもみられるが、こじんまりとした雑貨屋やレストランの前に地元の人たちがのんびり座って時を過ごす姿も多く、ベトナム人の日常に触れることもできる。

歩きたくなる街、ホーチミンか。

### <歩けない街：ジャカルタ>

インドネシアといえば、ASEAN 全体の 4 割を占める広大な国土、石油、天然ガス、石炭など豊富な資源、世界第 4 位の 2 億 5 千万人もの人口。これが巨大マーケットにつながることはいうまでもない。ベトナムとは真逆で、東西に細長い国土はヨーロッパのそれより長く、東京からシンガポールに至る距離を超えるというから驚く。労働人口(14~65 歳)がそれ以外の人口より多い、いわゆる「人口ボーナス」期が 2030 年代後半まで続く見通しで、なおかつ中間層の人口が現状の 1 億人未満程度から 5 年後の 2020 年には 2 億人に倍増するとか。そうはいつても、現状では国民の半数ほどが 1 日 2 ドル以下での生活を強いられている。

インドネシアは、歴史的にも大変な親日国である。オランダ領であったインドネシアを開放したのは、第二次世界大戦中の日本軍であった。当時流刑先にあったスカルノらを救出し、その後のインドネシアの独立を後押しし、日本敗戦後に再び占領を図ったオランダに対抗し、地元の人々に武器を提供し、一部残った日本兵はともに戦ったと。

そのような背景からか、現状で日本語の就学者は中・高で 87 万に達するという。若い人は日本のアニメにも詳しく、地元では JKB48 (AKB48?) も人気だそう。

インドネシアでは、昨年の大統領選挙によりジョコウィ新政権が誕生した。ジャカルタ州知事から新大統領に就任した庶民派のジョコウィ氏は、これまで内需の拡大、外国人の労働規制、外資の規制など内向的な政策をとり続けており、大幅な輸入超過を反転させるため工業用の塩などの輸入規制を行った結果、物価上昇からインフレとなり、ルピアが暴落した。石油、天然ガスなどのエネルギー鉱物資源は豊富だが、約 30%の大企業が殆どの事業を牛耳っている寡占状態で、中小企業による製造業が育たず、海外からの輸入製品に頼っている。

インドネシアの弱点は、法的不透明さにあるといわれ、大統領令と大臣令に齟齬がある場合もしばしば。全体の納税率がわずか 2%、法人税の納税率も 2 割程度で税収が極端に少なく、自前でインフラ整備などができないため、勢い外資に頼らざるを得ない。新大統領の手腕に期待するところ大か。

9 割の国民がムスリムだというのが、ジャカルタ市内の 4,800 のレストランのうち、ハラール認証を獲得しているのは、わずか 350 のみ。海外企業の飲食店(ケンタッキー、マックなど)はハラールを気にするものの、地元の人たちは意外とハラールに無頓着の様子である。

地元のビタンビールを仕込もうとホテル近くのコンビニを何件か回ったが、いずれもノンアルコールのビールしか見当たらず。翌日訪問先で確認したところ、過日、商工大臣がコンビニの前でビールを飲む少年をみかけ、憤慨してコンビニでのビール販売を禁止してしまったとのこと。業界団体の猛反発から、近く元に戻るだろうとのことだが、いかにも短絡的な措置で、外国人にとって気軽にビールを飲めないのは大問題。この辺りもお国柄か。

ジャカルタは、よく「歩けない街」といわれる。そもそもインドネシア国民には歩く習

慣があまりなく、めんどくさがりで車を使いたがる。交通インフラが整備される前に街ができてしまった。ジャカルタの人口は1,500万人で東京より多いが、道路面積は東京の半分。そんな事情によるらしい。

日中の訪問先から戻る途中、ホテルから目と鼻の先でショッピングモールに立ち寄ろうとして、バスを下してもらった。ホテルのようなビルの敷地内らしかったが、そこから車道までの間に歩道らしきものがなく、車道はバイクと車が猛スピードで行き交うため、危険極まりなく、おまけにわずかな歩道らしきスペースには下水の穴ぽこが口を開けており、ほとんど歩けない。信号がないため、向い側のショッピングモールにも渡れない。後ろを振り向きながら必死の思いで何とかバイクと車の間をすり抜け、屋台が並んだ歩道らしきところまで辿り着いた。大袈裟ではなく、命の危険をもろに感じた。

「ジャカルタは歩けない街」を実感した一幕であった。

《後日談》年明け1月14日にジャカルタで発生した過激派組織によるテロ事件は、この立ち寄れなかったショッピングモール:サリナデパート(日本のゼネコンが建設したジャカルタ最古のデパートらしい)の前と、車道を隔てたスターバックス(下水の穴ぽこで歩きづらかった辺りのビル1階)の2か所で起きた。宿泊したホテルから歩いて(実際は前述のとおり歩けなかったが)2~3分の場所である。記憶に残る思い出となった。



ジャカルタ大聖堂前で



## 初めての海外を経験して

大沼 有沙

### はじめに

今回の海外派遣研修が私にとって初めての海外だった。普通の旅行ではできない経験がしたいと思いこの研修に参加し、実際にベトナムとインドネシアでの日本の活動や活躍を見ることができた。また、さまざまな人と関わることができてとても良い経験になった。

### ベトナム

まず到着して、バイクの量とクラクションの音に驚いた。車よりもはるかにバイクの数の方が多く、さらに車線がしっかりしていないため、バイクも車も自由に走っていて、日本では考えられない光景だった。公共の交通機関が発達していないため、中学生までの子どもは親がバイクで送り迎えするそうだ。朝や夕方子どもを後ろに乗せた人を多く見かけた。JICA で、ベトナムはほとんど電車が走っておらず、今後日本の支援で開通する予定だという話を聞いた。ベトナムの人は駅というものを知らないらしい。



街を行き交うバイクの様子（ベトナム）

ベトナムで最も印象に残っているのはFFSCで子どもたちと遊んだことだ。子どもたちはみんな似ている服を着ていたが、日本の制服のように全く同じというわけではなかった。授業中の子どもたちが日本語で日本の歌をうたってくれた。幼稚園や小学校でうたったことのある歌ばかりで、ベトナムでも同じように授業でやると知り感動した。交流では日本から持って行ったなわとび、竹とんぼ、折り紙で子どもたちと夢中になって遊んだ。言葉は通じなくても十分にコミュニケーションを取ることができた。

ツーザー病院では枯葉剤の影響を受けた子どもたちに会った。ベッドから動けない子もいれば元気に走っている子もいた。社会になじめるように教育を受けているという。ボランティアとして働く日本人が以前はいたが、現在はいない。言語の壁はあるが、やりたければ誰でもできるとのことだった。館内の見学では枯葉剤の被害に合った胎児の標本を見た。話を聞いて知っていたつもりでも、実際に見るとショックだった。ドクさんにお会いすることができた。

ベトナム人が一番好きな国は日本だと聞き、嬉しく思う。日本語を話せる人が多く、買い物も日本語ですることができた。学校で日本語を勉強する人もいるが、日本人観光客と話しているうちに日本語を覚える人も多くいるそうだ。ものの値段が決まっておらず、値切って買うというのはすごく面白い経験だった。通訳さんも、買い物をしたお店の店員さ

んも、レストランの店員さんも、出会った人たちはみんな笑顔を向けてくれて、とても温かい国だと感じた。

## インドネシア

インドネシアは車が多くて渋滞がひどく、どこへ行くのにも時間がかかった。バイクの量はベトナムに比べると少ないが、日本よりは多い。みんな運転がうまく、渋滞しているわりにはスピードが速く、驚いた。日本人がインドネシアで運転するには相当な技術が必要だと思った。郵便局の近くにある広場のようなところでは、日本のアニメなどのキャラクターの着ぐるみを着ている人がたくさんいて、お金をあげると写真を撮ることができるようになっていた。道端では歌っている人がいて、座っている人に対して突然歌いだし、きいた人はきちんとお金をあげていて、不思議な光景だった。こんな風にお金を稼いでいる人たちもいることがわかった。

インドネシアで最も印象に残っているのは、ダルマプルサダ大学の学生と交流したことだ。みんな日本語がとても上手く、日本について詳しく知っていた。日本語を勉強し始めてから2,3年だとは思えない。今は中学や高校で日本語を学ぶ人も多くいるという。交流では、同じアイドルが好きということで話がとても盛り上がったし、友達になることができた。日本のアイドルがインドネシアでも有名で、ファンもたくさんいるということを全く知らなかったのが、驚いた。また、よさこいを踊っている人がいることにも驚いた。私もよさこいを踊ったことがあったのでたくさん質問をされたが、詳しいことを知らなかったので全然答えることができなくて残念だった。日本の文化について日本人よりも詳しく、私ももっと日本について勉強するべきだと思った。

車に乗って街を見ていると、大きなビルなど立派な建物が多くあった。建設中の建物もあり、発展の途中なのだと感じた。JICAで、観光を強化することで地方を強化させていくとのお話があったので、トイレをきれいにしたり交通の整備がされたりすると、日本人がもっと観光に行きやすいと思う。

## おわりに

日本人が知らないだけで、海外でも日本のお金がたくさん使われていることを知った。実際に見て、経験しないとわからないことばかりだった。水がまずい、トイレが汚いとマイナスなイメージを持っていたが、そんなことは気にならないくらい充実した毎日で、行くことができ本当に良かった。またいつかベトナムにもインドネシアにも行きたい。

## 井の中の蛙大海を知らず

奥田 優作

先日 2015 年北海道海外派遣事業としてベトナムとインドネシアに 11 月 1 日から 8 日まで行ってきた。人生初海外であったこの事業はとても魅力的なものであり、自分の価値観や今後の進路等に大いに影響を与えるものであった。そもそもこの事業に参加しようと思ったきっかけは、現在大学 2 年生の大学生である私は、来年英米圏への留学を考えており、その手始めとして海外渡航を短期間経験してみたいと思い応募することにした。本文では、私自身が経験し感じたこと学んだことを稚拙な文ではあるが綴りたいと思う。

この事業の中で私が大きく印象が残っている事が二つある。一つ目はベトナム、ホーチミン市での訪問先、FFSC である。ここは諸事情により家族と一緒に暮らすことが出来ない子供たちや、学校に通い学ぶ事が難しい子供達が集い、生活をするというところであった。

日本は義務教育であり全ての子供たちは等しく一定の教育を受けることが出来る、しかしながらベトナムではそうではない。ベトナムは経済成長はとても飛躍的であるものの、まだまだ国民の所得水準が低く、国民の経済格差がひどく残る地域でもある。「貧しい、大変、可哀想」そういった固定観念を抱きながらの訪問であった。しかしどうであろう、私は間違っていた。彼らは何一つ、日本の子供達と変わらなかったのだ。日本の子供達と同様外で元気に遊び、よく笑い、未来に対して希望をもっている子供達ばかりであった。そう、私は何も知らなかった。大学生である私は貧困国に対してのある程度の知識も持ち合わせていると思っていたが、それは「井の中の蛙」であったとその時知らされたのである。むしろ無邪気に外で元気いっぱい遊ぶ彼らは、何不自由なく生活を送る日本の子供達よりも、純粋でキラキラ輝いていた。それに彼らは何に対しても興味を示し、学ぶことに対しても日本の子供達よりも貪欲である。私達は豊かになりすぎたのかもしれない、そう思った。このように海外の子供達の現状の一部を垣間見る事が出来た FFSC は私の中でとても印象に残り、自分の考え方が変わるような訪問先であった。

二つ目は、ツーザー病院への訪問である。ツーザー病院はベトナム戦争での枯葉剤の影響によって体に障害が残る二世三世の人達が入院している病院である。ベトナム戦争は 1960 年から 75 年までであるが、その影響が今でも根強く残っているというのは衝撃的である。ストリートチルドレンがいた FFSC とはうって変わって、全くイメージがわからないまま訪問したが、そこはとても衝撃的であった。枯葉剤の影響などにより手足がない人達や、頭が肥大化し身体とのバランスが違う子供達など、戦争の影響を受け不自由な生活を余儀なくされてしまった人達が数多くいたのである。病棟は各階で隔離された場所にあり、鉄柵でしきられた所にあり、なんとも異様な雰囲気であった。その訪問先でも交流の時間が与えられたのだが、どのように接していいか判らず、ただ茫然と立ちすくんでしまった

のである。自分から何も彼らに対してアクションが出来なかった。それはなぜか。私の心の中で彼らに対する少なからずの恐れがあったからである。こういう事を言うのは、もしかしたら不適切であり失礼にあたるのかもしれないが、あの時は情けないがとっさに少しの恐れを感じてしまったのである。しかしその中で一人の少年が私に抱っこを求めてきたのである。彼はとても元気の良い、年齢でいうと小学生低学年といったところであろうか。私はとても嬉しかった。そして何よりも驚いたのは、彼の目はFFSCで出会った少年少女達と同じ目をしていたのである。とてもキラキラして未来に対して希望を抱いている、そんな目をしていたのである。またしても私は悟った、何も知らなかったのだなど。短い交流時間の後、そんな彼らを目の前にして少しの恐怖を抱いてしまった自分が本当に情けなく、またそれを抱いてしまった事に対しての悔しさが込み上げ泣きそうになってしまった。自分が認識していたことは間違っていたのだと気づくことができた。障害を持つ人々に対しての考え方が大きく変わるような訪問先であった。



ツーザー病院を訪問して（ベトナム）

以上私が印象に残った二つの訪問先をあげたが、その二つで共通していたことがある。それは、出会った彼らは皆、未来志向であり自分の境遇に屈していない事である。貧困国だからとかそんなことは関係ない。自分の抱く貧困国の人間像と彼らは全く違い、私達と同じであった。私は世界の事がある程度知ったつもりになっていて、何も知らなかったのである。「井の中の蛙大海を知らず」こんな言葉があるが、今の私にピッタリである。世界という名の大海原はまだ知らない、しかし今回ようやく井の外に出て景色を見ることが出来たと思う。今回の事業が、今後世界という名の大海を見ることへの糸口となればいいと思う。

## ベトナム・インドネシア海外派遣研修報告

千葉 禎子

この派遣事業は大学の掲示板で偶然見かけました。ベトナムもインドネシアも経済発展や観光という視点では多く日本でも取り上げられています。しかし、現地の人や現地の生活、習慣に目を向けることはあまりありません。私もまったく想像できませんでした。清潔で便利でどこに行っても整備されている日本にはもう無い、ちょっとした刺激を受けることを期待して、今回の研修に参加しました。

### ベトナム

今回はベトナムのホーチミンシティを訪れました。JICA 事務所や VJCC を訪問し、ベトナムの現状や日本が協力している事業、人材育成のお話を伺いました。国際協力というインフラ整備など設備や施設を作ることをイメージしていましたが、基盤となる法律や法律を作る人材、ベトナムに合わせたルールを作ることも同じくらい重要だと分かりました。日本で知識や技術を身に着けても、それがそっくりそのまま現地で使えるわけではありません。知識と技術とベトナムの人の感覚を持った人材が必要です。教育が大切だと改めて思いました。

FFSC を訪問しました。ストリートチルドレンの施設だと聞いていたので、初めは全寮制の学校だと思っていました。しかしそうではなく、家があって両親と一緒に住んでいても、十分な収入がないために学費が払えないという事情を抱えた子供たちが無料で授業を受けられるという施設です。子供たちは、そんな状況下にあってもみんな元気で無邪気なように見えました。子供たちと盆踊りを一緒に踊り、用意していった縄跳びや折り紙や竹とんぼで遊びました。みんな人懐っこくて、言葉が通じないことなんて忘れるくらいあつという間の楽しい時間でした。FFSC で遊んだ時の写真を見ると、楽しかった時間を思い出すと同時に、この子供たちは今どんなふうに過ごしているのだろうか、将来どんなふうに成長しているのだろうか、と考えます。今回実際に施設に行き、子供たちの置かれた状況、現状を少し知ることが出来ました。これを頭の片隅に置いて、自分で出来ることを探し、少しでも人に伝えていかなければと思います。

### インドネシア

インドネシアはいま、途上国ではなく中進国、新興国と呼ばれています。インドネシアは植民地として他国に支配されていた影響で、経済成長を始めるのが遅くなってしまったそうです。

視察した JABABEKA 工業団地は創業 26 年で、今現在世界 23 か国から 1000 以上の企業が集まっています。団地内には幼稚園・小学校・中学校・高校・大学、ホテルなどがあり、映画撮影所まで作る予定というお話でした。将来的には、工業団地というより 1 つの

街を創るのが目標だそうです。初めは工業団地と言われても、どんなものなのかイメージができませんでしたが、世界中から企業が集まって、団地内に大学まであるのを見て、これからどんどん発展していくような勢いを感じました。

ダルマプルサダ大学では日本語を学んでいる学生さんと交流しました。交流会参加希望者の中から面接で選ばれた(!) 15人の学生さんが迎えてくれました。彼らは日本語を勉強し始めてまだ2, 3年ですが、流暢に日本語を話していました。中学校・高校で6年間だらだら勉強してきた私の英語の出来とは大違いでした。学生同士でもインドネシア語だけでなく日本語で会話しているのを見ました。たまに、英語で会話をすることもあるそうです。だから短期間でこんなに話せるようになるのだろうと思いました。私は日本人の友達同士で英語を話すことは全くありませんでした。お互い英語を勉強していて、話せるようになりたいと思っているのにも拘らず、です。日本人同士で英語を話すのが何となく恥ずかしい、とってしまうからかもしれません。韓国人の先生に韓国語を習った際、「間違っても恥ずかしがる必要なんかどこにもない。言葉は、間違ってもいいから話さないと覚えられないし、むしろ間違えないと覚えられないよ」と言われたことを思い出しました。本当にその通りです。教材や勉強法ではなく学ぶ姿勢が大事だと、インドネシア語と日本語を混ぜながら楽しそうにおしゃべりしている彼らを見て思いました。この経験や発見を思い出に残すのではなく、役立てていけるよう努力したいです。



ダルマプルサダ大学の学生さんと（インドネシア）

## ベトナム・インドネシアの現状と課題

土崎 英二

### 1. ベトナム

#### JICA ホーチミン

JICA ホーチミンではベトナムの現状と JICA ベトナムの活動について酒井所長より説明いただいた。ベトナムは 1945 年第二次世界大戦後も 40 年にわたって戦争を続けてきた国。戦争からの復興がまだまだこれからという国である。法律が 40 年前に施行された古いものがまだまだあり、それが経済発展を妨げている場合もある。JICA および企業商工会議所による対話集会を年に 1 回行い、法律の改正について働きかけている。日本からの資金援助も行っているが円借款での割合が無償資金協力よりも上回っており、これはベトナムが発展してきていることを意味する。とは言っても平均月収が 3~5 万円、国立学校の授業料が月 2~3 万円では教育にお金をかけられない。教育無くして国の発展は望めない。インフラ整備にお金をかけるのも重要だが、富裕層ばかりが教育を受けられるのではなく、きちんとした教育制度の確立も急務と感じる。

ベトナムは日本にとって重要な貿易国。説明の中にあつた「途上国（ベトナム）の発展なくして日本の発展はありえない」という言葉が印象的だった。

#### FFSC（ストリートチルドレン友の会）

教育制度確立の必要性は FFSC に訪問してさらに強く感じた。ストリートチルドレン友の会は単にストリートチルドレンを受け入れている訳ではない。両親が貧しいなどの事情で FFSC に預けられている子供たちもいる。授業は午前の部と午後の部に分かれており、全日制ではないとの事。勉強をしたくても学校が午前のみ・午後のみでは十分な教育も受けられないであろう。

#### ツーザー病院

有名なベトナムドクちゃんが治療していた病院である。今は 2 児の父となったドクさんがこの病院で働いている。

病棟 2 階には奇形児として生まれた赤ん坊のホルマリン漬けが数多く保管されており衝撃を受けた。病棟 3 階には奇形児および脳性麻痺の子供たちが入院しており、ベトナム戦争時代の枯れ葉剤の影響が今にしてなお残っているという事実を見せつけられた。ベトナム戦争は決して過去のものではない。

### 2. ジャカルタ

#### JETRO ジャカルタ（独立行政法人日本貿易振興機構）

食品サービス担当の春田麻里沙様（シニアディレクター）より説明いただいた。主に外国企業

に対する誘致活動を行っている。

ジャカルタは都心部では巨大なビルが立ち並んでいるが、少し大通りを外れると古い平屋が並ぶ。どこがおいしいのかわからないミーゴレンの屋台がここかしこに並んでいる。道路の面積も少ないので渋滞が頻発している。私が真っ先に思い浮かんだのは「再開発の必要性」。外国から企業を誘致するといってもどのように土地や建物を確保するのか。区域区分を設定し、再開発の際にはきちんと道路を拡充し、人も物も流通をスムーズにするなど必要。ただし政府の資金が不足しているため、開発は民間に委ねられている。

### JABABEKA 工業団地

民間で開発を行っているのがこの JABABEKA 工業団地。住居のほか大学・ホテル・ケアセンターなどがある。現在は病院地区を建設中。ジャカルタ中心部より車で1時間半～2時間のところに位置している。政府で開発できない以上、民間に頼るほかないようだ。

JABABEKA 工業団地は開発から26年、さらに拡大するには土地の確保が必要と思われる。このような民間の街づくりが頻繁に行われると閉鎖的な街にならないのだろうか、疑問が残る。

### JICA ジャカルタ訪問

JICA ジャカルタの荒津有紀次長より説明を頂く。インドネシアはASEANでも中心的な存在ながらベトナムと同じくインフラ整備がまだまだ不足している。ここでも道路が不足しているという話が出た。現在、日本の援助で地下鉄が建設中だがはたして地下鉄完成後でも交通渋滞が解消されるのだろうか。このバイクと人の多さをみると疑問である。

両国とも車より圧倒的にバイクが多い。徒歩で道路を横断するタイミングが無い。ジャカルタでは私たちの乗った車が渋滞に巻き込まれ、通常1.5～2時間のところが3時間20分もかかった。これでは人も物も流通しにくい。経済発展のためには早急に流通網の整備が必要である。市場では炎天下の中、肉や野菜が売られており八百屋に挟まれて爪切り屋がある。相乗効果など何も考えられていない。効率的な街づくりが急務と思われる。ベトナム・インドネシアともに再開発の必要性を感じた。両国とも若い労働力が多いので戦後日本がそうしてきたように、将来の発展を期待したい。



ジャカルタ市内の露店の様子  
(インドネシア)



## 世界に負けない戦い方

松山 由紀

ベトナム社会主義共和国。社会主義とは思われないほど、今勢いがありそして若い人が多い国である。平均年齢 27.5 歳。日本が 45 歳なのだからずいぶん違う。約 20 年前、私がベトナムを訪れた時と情勢はかなり変わった。貧しいイメージはあまりなく、富裕層が増えているという印象を受ける（ホーチミンに限ったことだろうが）。ホーチミンにあるイオンもオープン時には大勢の市民がバイクで駆けつけ（面白いのは広大な「駐車場でなく二輪専用の駐輪場ばかりという点。）、値段が高いのにもかかわらず多くの人々が購入する。

国土は南北に長く、国土の面積は日本の約 90%、人口も日本の 90%。そして国民性は大変真面目。日本とよく似ているといわれる。しかし私が着目したのは、ベトナムは世界きっての「農業大国」であるということだ。

代表的な農産物を紹介しよう。米：世界第 3 位　メコンデルタというメコン川河口に広がる低湿地帯がある。ここで米の国内生産量の半分を占めている。輸出量は世界第 2 位。コーヒー：世界第 2 位　カシューナッツ：世界第 1 位　コショウ：世界第 1 位　お茶：世界第 6 位

ホーチミンでの最後の夜、ベントイン市場横のナイトマーケットである青年に出会う。歌手、榎原敬之のそっくりさん。「素敵な帽子ないかな〜。」私たちのつぶやきを拾い、近くの洋品店を回り、「これはどう？」と流ちょうな日本語でガイドしてくれる。（彼はいったい何の目的でこんなに親切にしてくれるんだ？）と各々が不思議に思いながら彼の案内を楽しむ。とうとうマッキーが口火を切った。「コーヒーはどうですか？」彼はコーヒー豆屋さんだったのだ。恐る恐る近づくとやはり一番高いコーヒー豆のご紹介。ジャコウネコという猫が、熟したコーヒーの実を選び、その果肉だけを味わい、種（いわゆる豆）はそのまま飲み込んでしまうので、その糞から豆は未消化で採れる、というコーヒー豆らしい。世界でも最高級品らしく、東京では 1 杯 1,800 円だとか。試飲をしたら美味しい。とても美味しい。ベトナムコーヒーはミルクとしてコンデンスミルクを使う。これがまたなんとも美味。すっかり気に入って、それを 200 g 30 万ドンで豆のまま、無類のコーヒー好きな北大生（どこでもコーヒーを買って飲んでいる。）とともに購入。

コーヒーの世界第 2 位の生産量を誇るベトナム。私たちが使うスーパーにベトナムコーヒーを売っている店はあるだろうか。ないのだ。なぜか。それは生産量があつとしても、高い品質、均一性がない。だから輸出できるほどの量が作れない。たくさん生産しても、高級品は本当に一握りのものでしかない。



マッキーと（ベトナム）

ところで、先般日本政府は TPP の交渉で大筋合意した。多くの輸入品の関税が撤廃されることになり、道内農業者の間に不安が広がる。米の生産額は 1,064 億円（平成 22 年のデータ）。実現されると道産米の 3 割が米国産、豪州産に置き換わり、残りも価格が大きく低下、産出額では 50% 減少するという。精米業にも 259 億円の打撃と与え、1 万 4000 人の雇用を失う。という。（農業協同組合電子版より）確かにこのデータを見ると不安になる。

平成 27 年 12 月吉日。7 時のニュースを見ているとハノイの「イオン」の映像が流れた。青森産のりんごが店頭に並ぶ。生産額 50 万トンのうち 2 万トンがすでに台湾、香港で売られている。どうやら一個約 300 円前後売られているようである。日本で 300 円なら高い。なかなか手が出ない。でも東南アジアでは日本産への味や安全性への信頼度が高い。贈答用になっているようだ。平成 26 年は世界に 110 億円売り上げている。ベトナムも富裕層の拡大に伴って日本産の食品の需要が高まっている。りんごは成功例の一つである。

日本の農業は世界で受け入れられるはずだ。高い農業技術があり、特に北海道は食糧自給率的にも日本の農業をリードしているはず。しかし日本全体で言えることだが、北海道ももれなく高い術を持ちながらも担い手不足である。そしてベトナムは担い手がいてもコーヒー豆の例のように技術がない。お互いの良いところを補完しあいながら、TPP 大筋合意した今、攻める農業に転じるチャンスかもしれない。りんごの例のように、加工したサンマをベトナム人研修生を受け入れてベトナムに広めている根室の例など、6 次産業化はさらに重要になってくる。北海道の 1 次産業を盛り立てていく道筋をつけることで、世界の食の中心となれるのだ。また、私たち消費者は、北海道の農業を守るべく行動しなければならない。食品添加物・遺伝子組み換え食品・残留農薬などの規制緩和により、食の安全が脅かされることで私たちの子が危険な目に逢わないよう世の中の動きを注視しなければいけないと考えている。攻めて守る。北海道がこれからつける力は日本の将来を占うようにもみえる。

## 発展途上国での学び

美濃 佑奈

### はじめに

私は、学校でフェアトレードという活動や、インドに行った経験から国際協力に興味を持つようになった。インドでは物乞いをしている子供達を直接見たことから主に子供たちの手助けになりたいと考えている。そんな中、ホームページで今回の海外派遣研修について知り、内容が私の学びたい分野であったこと、将来の夢を実現するために役に立つと思い今回応募に至った。今回の海外研修に参加するにあたり、「日本がどのように発展途上国に支援しているのか、ストリートチルドレンについて学ぶ」ということをテーマにした。

### JICA、JETRO 訪問

今回、JICA ベトナム事務所とインドネシア事務所、JETRO ジャカルタ事務所に訪問した。まず、JICA は、「日本の持っている知識や技術、資金を使って途上国の発展に協力すること」が仕事である。日本が国際協力をしている理由は、地球規模の問題解決に貢献するのは先進国の義務であり、発展途上国の成長は日本の繁栄にも繋がるからだ。また、困った時は助け合うという気持ちから支援をしている。支援の内容としては、技術協力と資金協力が主である。技術協力では、日本から農業開発、保健医療や政府への政策支援など各分野でアドバイザーを派遣し技術を伝えている。また、青年海外協力隊やボランティアの派遣も行いその手助けを一緒に行っている。資金協力では、有償資金協力と無償資金協力の2つがあり毎年多くの額を資金にあてている。

JETRO は、主にビジネスをするお手伝いや中小企業の開発の援助など商売という分野に焦点を置き支援をしている。

### ベトナムの概要と支援

総人口の 40.9%が 25 歳以下の若い国である。北部・中部・南部に分けることが出来るが、特に中部は貧困が多いとのことだ。1980 年代半ばまで戦争状態であったことから、他の国に比べ国が発展するのが遅れ、ようやく最近になって発展してきた。ベトナムと日本の関係は親日家も多く良好であり、日本のノウハウが求められている。工業国化を目標に、成長と競争力の強化・ガバナンス強化・脆弱性への対応に重点を置いて支援をしている。ベトナムは、安価であり若い層の人口が多く労働力も多いことから、活気がありこれからの成長が楽しみな国である。

### インドネシアの概要と支援

国土が世界第 15 位、人口が世界第 4 位と巨大国家であり、ASEAN では全体の 4 割を占めている。また、日本への高い信頼を持ち、日本語就学者数も世界第 2 位であり、最も重

要な投資国及び貿易相手国ということもあり、日本にとっても重要な国である。JICAの支援では、無償資金協力は既に卒業し、数年後には有償資金協力の借款も卒業予定であり、また、大きく成長した国である。今後は、どんどんインドネシアとビジネスをする国や会社が増えていき、より経済が発展していくとのことだ。地方開発・道路のネットワーク・電力の供給が主な課題である。

### ストリートチルドレンについて

ストリートチルドレンとは、住む家も家族も持たない子供たちが路上で物売りや物乞いをして生活をいっている子供達のことだけを指すと思われるが、ベトナムでは、田舎から収入を求めて都会に流れてきた子供たちを主にストリートチルドレンと呼んでいる。多くの子供たちは、家族が居て住む場所もあるが、家の経済状況から教育を受けることが出来ない子供達が多くいる。なかでも今回訪問したストリートチルドレン友の会ではこういった子供たちの支援を行っている。

### ストリートチルドレン友の会（FFSC）での支援

FFSCでは学校に通えない子供達に無料で事業を行っている。里親制度があり、子供達が学校に通うための奨学金としてや家計に回すことで利用している。そのため、子供が路上で働かねばならないという環境を改善出来ている。現在、300人以上の里親がいるが、約200人は日本人である。また、職業訓練もあり技術を身につけている子供もいて、そこで作られた刺繍などは売られている。

### ストリートチルドレンとの交流

今回初めて直接子供達と交流することが出来た。私たち派遣員は、折り紙・竹とんぼ・縄跳びなどの日本の伝統的な遊びや盆踊りを紹介した。言語を使っただけの交流は難しかったが、ジェスチャーなど使い交流ができ子供達も楽しんでくれたようだ。驚いたことに、みんな順番を守るなどきちんとルールを守っていて、ここでの教育の良さを実感することも出来た。最初は、私たちが子供達に何かしてあげたいと思い交流していたが、逆に私たちが子供達からたくさんの元気もらった。



FFSC の子ども達と北海盆踊りを踊った（ベトナム）

### 終わりに

8日間はとてもあっという間でとても濃い毎日だった。今回のテーマであった、国際協力・ストリートチルドレンについて多く学ぶことが出来て良かった。直接自分自身の目で見て体験することで、より強く将来発展途上国の支援をしたいという気持ちが高まった。今後は、今回の学びを通し自分に何が出来るのかを見つけて行きたい。

## 海外派遣研修団員名簿

(五十音順)

No	氏 名	性別	職 業	
団長	いしい ひろみ 石井 博美	男	団体職員	北海道国際交流・協力総合センター 事務局長
団員	おおぬま ありさ 大沼 有沙	女	大学生	
"	おくだ ゆうさく 奥田 優作	男	大学生	
"	ちば ともこ 千葉 禎子	女	大学生	
"	つちざき えいじ 土崎 英二	男	会社員	
"	まつやま ゆき 松山 由紀	女	教 諭	
"	みの ゆうな 美濃 佑奈	女	大学生	
添乗	もりや あきひろ 守屋 彰寛	男		株式会社わくわくホリデー

## 平成 27 年度海外派遣事業スケジュール

### 【派遣国】ベトナム、インドネシア

日次	月日・曜日	都市名	時 間	交通機関	内 容	宿泊地
1	11月1日 (日)	新千歳空港  →ホーチミン	14:05 17:15 19:00 22:35	KE766  KE683	ソウル経由で  ホーチミン着	ニューエポックホテル (ホーチミン)
2	11月2日 (月)	ホーチミン	9:40 11:00 午後	専用車	JICA ベトナム事務所 ベトナム日本人材協力センター 市内視察	同上
3	11月3日 (火)	ホーチミン	8:30  14:00	専用車	FFSC(NGO) 訪問 子どもとの交流 ツーザー病院	同上
4	11月4日 (水)	ホーチミン →ジャカルタ	10:00 13:00 午後	VN631 便  専用車	  市内視察	オリアホテル (ジャカルタ)
5	11月5日 (木)	ジャカルタ	10:00 13:00	専用車	JETRO ジャカルタセンター JABABEKA 工業団地視察 ・若手中小企業事業者との 懇談 ・大学他学園施設訪問	同上
6	11月6日 (金)	ジャカルタ	10:00 12:00 15:00 19:00	専用車	JICA 訪問 ハラルフード体験 ダルマ・プルタガ大学訪問 大学生との交流 夕食会	同上
7	11月7日 (土)	ジャカルタ  ジャカルタ	  22:05	  KE628	グループ(自主)研修  ソウル経由で	機 内
8	11月8日 (日)	  →新千歳空港	6:55 10:05 12:45	  KE765	  新千歳空港着	

## 行 動 記 録

日付	発着・滞在地	交通機関	時間	内容
11/1 (日)	新千歳空港		11:30	新千歳空港 国際線ターミナル 3F HIECC 金子氏より、現地での訪問地へ持参するお土産を預かる。
			11:40	結団式。 ・団長より結団の挨拶。
			13:10	チェックインを済ませ、現地でのスケジュールについて小ミーティング
	新千歳空港→ 仁川空港 (韓国)	KE766 大韓航空	14:20	仁川空港へ向け離陸。
			16:50	仁川空港に到着 ・乗り換えのため、ホーチミン行き出発時間まで待機
	仁川空港→ タンソンニャット 国際空港 (ホーチミン)	KE683 大韓航空	18:40	ホーチミン行き搭乗チェックイン
			19:40	ベトナム・ホーチミンへ向け出発 (現地時刻)
			22:35	タンソンニャット国際空港へ到着。 現地ガイドのバオ氏と合流。
			23:20	バスにて軽食店に向かう ・バス内にてバオ氏より注意事項説明 ①バイクが多いので道を渡るときは気を付けること ②ひたくりが多いので貴重品はできるだけ持ち歩かないこと ③時々スコールがあるので雨具を持ち歩くこと
			23:30	軽食店に到着。フォーをいただく。
		0:10	ニューエポックホテルに到着。 ・チェックイン後、部屋の環境を確認。バスルームのお湯・ネット環境など。 ・1室に電気がつかない不具合があり、ルームチェンジ発生	
11/2 (月)	ホーチミン	備上バス	9:05	ホテルロビーに集合
			9:10	ホテル出発
			9:35	JICA ベトナム (ホーチミン) に到着 ・北大 4 年生で来年から JICA に入構する田中様も同行。 ・酒井利文所長よりベトナムの現状と JICA ベトナムの活動・ベトナムの歴史について説明いただく。
			10:50	終了

ホーチミン		<p>10:55</p> <p>11:18</p> <p>12:10</p> <p>12:33</p> <p>13:10</p> <p>13:17</p> <p>13:27</p> <p>14:38</p> <p>15:23</p> <p>16:30</p> <p>17:00</p> <p>17:30</p> <p>17:45</p> <p>18:00</p> <p>19:20</p> <p>20:20</p>	<p>VJCC に向け出発</p> <p>VJCC に到着</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・若林勇飛(業務調整専門家)様よりベトナムでの人材育成についての説明。</li> </ul> <p>説明終了</p> <p>昼食</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昼食は Dim Sum。</li> </ul> <p>食事終了。</p> <p>戦争博物館に向け出発</p> <p>戦争博物館に到着</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まず外で博物館についての説明をいただく</li> <li>・個人行動にて館内見学</li> <li>・ベトナム戦争の傷跡を展示している博物館である。</li> <li>・枯葉剤の影響による奇形児のホルマリン漬けが展示してあり、衝撃的であった。</li> <li>・様々な写真家によるベトナム戦争の写真があった。戦時中の写真だけでなく、戦後も続く枯葉剤による障害と戦っている人々の写真もあった。</li> <li>・日本語で説明が書かれているものもあった。</li> <li>・お土産販売コーナーに日本のキャラクターのものが多くあった。</li> </ul> <p>統一教会および中央郵便局を視察。</p> <p>市内視察（ドンコイ通り）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人行動にて市内を視察</li> </ul> <p>視察終了</p> <p>ホテル着</p> <p>北海盆踊りの練習、曲の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3日に訪問する FFSC および6日に訪問するダルマ・プラサダ大学で交流のため披露する北海盆踊りを1室に集まり練習。日本を発つ前に個別練習をしてきたが、初の全体練習。</li> </ul> <p>練習を終了</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単純な動きであるため、ある程度かたちにはなっていた。</li> </ul> <p>レストランへ移動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ウェイトレスが非常にせっかちであり、食事の皿を片づけようとする。</li> </ul> <p>デザートはバナナがまるごと1本、みんな苦笑しながらバナナの皮をむく。</p> <p>ナイトマーケット視察</p>
-------	--	---	---



	ホーチミン		21:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>・盆踊りのユニフォームとして団員おそろいの T シャツを購入。1 枚 160,000 ドンの T シャツを 90,000 ドンまで値切り。日本円で約 960 円を約 540 円まで値切った。</li> </ul> <p>ホテル着</p> <p>1 室に集合し折り紙の練習とプレゼン準備</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3 日、FFSC にて子供たちと交流するため折り紙の折り方復習と練習。</li> <li>・並行して 6 日にダルマ・プラサダ大学にて発表するプレゼンの資料作り。</li> <li>・HIECC より貸与された PC でプレゼンの準備をしていたが、途中で PC がダウン。充電器をつないだが充電されず、PC も立ち上がらない状態。ベトナムへ到着 2 日目にして PC 破損。盆踊りの音源 CD も PC に入ったまま取り出せない。</li> <li>・団員の 1 人が持ってきていた私物の PC でパワーポイントが使用できたため、急遽 PC を変えてプレゼン準備。ただし、最初から作成し直すこととなる。</li> </ul>
			1:00	解散。
11/3 (火)	ホーチミン	備上バス	8:00	ホテルロビーに集合 FFSC へ向け出発
			8:20	FFSC 事務所に到着
				<ul style="list-style-type: none"> <li>・バスが目的地の反対車線に停車したため、下車後、道路を多くのバイクが行きかう中 J-WALK せざるを得ない。手を挙げながら恐る恐る横断。</li> </ul>
			8:30	校長先生より FFSC についてブリーフィング
				<ul style="list-style-type: none"> <li>・かわいい手作りの小物などを購入できた。</li> </ul>
			10:00	学校へ移動
				<ul style="list-style-type: none"> <li>・前日に HIECC から貸与されているパソコンが使えなくなった。このパソコンの中に盆踊りの音源 CD が入ったまま取り出せなくなっていたため、学校のパソコンを借りて Youtube から盆踊りの音源を確保。スピーカーに接続して音源チェック。</li> </ul>
			10:15	学校内見学
				<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業中の子供たちが、歓迎の印に日本語の歌を歌ってくれた。</li> </ul>
			1030	高学年の生徒と交流開始
				<ul style="list-style-type: none"> <li>・団員で北海盆踊りを披露。</li> </ul> <p>その後、生徒たちと一緒に北海盆踊りを踊る。</p>

	ホーチミン		<p>盆踊りのあと、大縄跳び。持参した竹とんぼ・折り紙で交流。</p> <p>11:35 校長先生より団員へ挨拶。 ・団員の1名が小学校の先生であり、生徒から寄付を募った石鹸やタオルやボールペン、あめを学校へ進呈。</p> <p>11:45 学校にて昼食をいただく</p> <p>12:30 昼食終了。FFSC のノートに感想を書く。</p> <p>12:50 FFSC を出発</p> <p>13:30 民芸品店視察。 ・FFSC のあと、ツーザー病院へ行く予定だったが、急遽 13:00 にツーザー病院へ ドイツの外務大臣訪問が入ったため、ツーザー病院訪問と民芸品店視察を入れ替えた。</p> <p>14:45 ツーザー病院へ向け出発</p> <p>15:09 ツーザー病院へ到着</p> <p>15:15 ツーザー病院社長より病院の紹介と説明 ・有名なベトちゃんドクちゃんが治療していた病院。現在は2児の父親となっているドクさんが広報として働いている。 ・病院到着時にドクさんが迎えてくれた。</p> <p>16:05 院内見学 ・2階の1室に枯れ葉剤の影響で奇形となった赤ちゃんのホルマリン漬けが多数保存されている。 ・3階は脳性麻痺の子供たちが入院している。 ・ドクさんと記念写真を撮ろうとしたがドクさんの姿が見えず。ドクさんがバイクに乗って退勤の瞬間を病院の3階から目撃。</p> <p>16:30 ツーザー病院を出発</p> <p>16:43 ホテル着</p> <p>17:05 サイゴン川へ向け出発</p> <p>18:59 サイゴン川でディナークルーズ</p> <p>19:30 ・景色を楽しみながらのクルーズであったが出航15分後にスコール。私たちのテーブルにて雨漏り発生。</p> <p>21:50 ホテル着。解散。</p>
11/4 (水)		備上バス	<p>7:15 チェックアウト</p> <p>7:40 ホーチミン国際空港へ移動 ・現地ガイドのバオさんは本日別の用事があるため 代わりのガイドが案内(名前を失念)。</p>

	タンソンニャット 国際空港 (ベトナム) → スカルノ・ハッタ国際空港  (ジャカルタ)	VN631 ベトナム 航空  備上バス	7:45 10:20  12:55 13:40  14:30 15:58  13:08  16:28  17:51  19:05  22:00 1:00	搭乗チェックイン ジャカルタへ向け出発  スカルノ・ハッタ国際空港に到着 現地ガイドのアムソリさんと合流 ・バスで移動中、簡単なインドネシア語を教えてもらう。 スンダクラバ港視察 跳ね橋へ移動 ・オランダ統治時代に作られた跳ね橋。 ファタヒラ広場へ移動 ・オランダ統治時代に建てられた建物が並ぶ。現在は郵便局や博物館として利用されている。 ORIA HOTEL 着 ・チェックイン終了 ・部屋にドライヤーなし。フロントへ何度訴えても結局、滞在中に持ってきてくれることは無かった。 夕食レストランへ向け出発 ・このレストランでは酒の提供がない。免許のあるレストランでなければ酒の提供ができないそうだ。 ・ソフトドリンクも冷えたものが提供されなかった(常温のコーラが提供された)。 ホテル着 ・ホテルの横にセブンイレブンがあるが、ここでも酒は売っていなかった。 ・あとで聞いた話だが、前々外務大臣の方針により、コンビニでの酒の販売は法律により禁止されているのだそうだ。 ・ホテルからコンビニへ行く道の地面に穴があいていて落ちそうだった。 1室に集合し、6日訪問のダルマ・プラサダ大学で発表するプレゼンの準備 解散
11/5 (木)	ジャカルタ	備上バス	9:00 9:30	ロビー集合。ホテル出発。 JETRO 到着 ・JETRO 駐在員、食品サービス担当の春田麻里沙(シニアディレクター)様より説明いただく。 ・インドネシアの経済発展状況、インドネシア特有

	ジャカルタ			<p>の習慣によって起きている問題、今後の課題についてのお話をしていただく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他に貿易に関すること、ジャカルタでのビジネス展開についての説明。</li> </ul> <p>10:45 説明終了</p> <p>10:54 JETRO を出発</p> <p>11:35 パーキングエリアで昼食</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミーゴレンをオーダーしたが料理が出てくるまで 25 分待つ。</li> </ul> <p>12:22 パーキングエリアを出発</p> <p>12:51 JABABEKA 工業団地に到着</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・有本堯史郎(アドバイザー)様より説明を頂く。</li> </ul> <p>14:19 説明終了</p> <p>14:37 PRESIDENT UNIVERSITY へ移動</p> <p>Jhanghiz Syahrivar (国際室ディレクター)および Tien Lamanna (財務担当)より大学についての説明をいただく</p> <p>15:35 説明終了</p> <p>15:52 PT.YAMANASHI 着</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日系企業で自動車部品を製造している会社。</li> <li>・工場見学と山梨朋樹所長より工場の説明 貿易に関する苦勞話、蔓延する収賄の話、現地ワーカーとのコミュニケーションについての話。</li> </ul> <p>16:35 説明終了</p> <p>16:40 PT.YAMANASHI を出発</p> <p>16:53 ケアセンターへ移動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本でいう老人ホームである。</li> <li>・ユズリハラ様よりケアセンターについての説明</li> <li>・料金説明を時間をかけて詳しく説明してくれていたが、「実際に入居する訳でもないのに料金説明を詳しく説明しなくてもよい。それより館内を案内してよ」との通訳さんの一喝で館内を見学</li> </ul> <p>17:10 館内見学終了</p> <p>17:37 ケアセンターを出発</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャカルタは道路の面積率が低く、普段でも渋滞している。この時間は通勤時間とも重なり、ひどい渋滞に巻き込まれ、ジャカルタ市内のレストランへ 3 時間 14 分かけてやっと到着</li> </ul> <p>20:51 夕食終了</p> <p>22:00 ホテルに到着</p>
--	-------	--	--	--

	ジャカルタ		22:50	団員の宿泊している 2 階にて非常ベルが鳴ったが特に従業員が来るわけでもなく煙や火災の気配もなく、誤報と思われた。団長が宿泊している 5 階ではならなかったようだ。
			23:10	1 室に集合して 6 日のプレゼンの準備と最終確認
			1:00	解散
11/6 (金)	ジャカルタ	備上バス	9:20	ロビー集合
			9:26	ホテルを出発
			9:46	JICA ジャカルタ着 ・荒津有紀次長よりジャカルタの現状と JICA ジャカルタの活動について説明
			11:00	説明終了
			11:15	JICA ジャカルタ隣にあるショッピングセンター (FOOD HALL) 視察
			12:00	ショッピングセンターを出発
			12:10	昼食 (ハラル体験) ・現地ガイドのアムソリさんの同僚、ユーシーさんが合流。 ・ダルマ・プラサダ大学に訪問時、プレゼンで使用するパソコンをユーシーさんが用意してくれており、私たちが作成したパワーポイントの動作確認を行う。
			13:02	レストランを出発
			13:28	大統領官邸 外観のみ
			14:39	ダルマ・プラサダ大学に到着 ・ユーシーさんの PC とプロジェクターをつなぎ、動作チェック。
			15:15	交流開始 ・ダルマ・プラサダ大学は 15 名の学生が参加。25 名の参加希望者のうち、面接で合格した 15 名が参加。
			15:20	ダルマ・プラサダ大学よさこいソーラン部 5 名による演舞
			15:25	北海盆踊り ・団員 5 名とダルマ・プラサダ大学の学生 15 名 全員で踊る。
			15:40	プレゼンテーション開始 ・団員による日本の紹介。 ・1 名ずつ 北海道の紹介→日本の正月を紹介→成人式紹介→札幌雪祭り紹介→

	ジャカルタ		<p>夏祭り紹介→日本の大学紹介</p> <p>15:57 プレゼンテーション終了</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本に興味がある学生だけあって、私たちが説明したことはほとんど知っていたことだったらしいが、写真は喜ばれた。</li> </ul> <p>15:59 フリーディスカッション開始</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3班に分かれてディスカッション。</li> <li>・筆ペン体験をしていただく。</li> </ul> <p>17:20 レストランへ移動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学では学生との交流であったが、夕食には文学部日本語学科のハルゴ・サプタジ学科長も参加。</li> </ul> <p>17:50 バイキング形式の夕食開始</p> <p>18:30 お祈りの時間。一部のムスリムの学生がお祈りため一時席を外す</p> <p>19:15 夕食&amp;交流終了。レストランを出発</p> <p>20:08 ホテル着</p> <p>21:00 ホテル向かいの <b>BEER GARDEN</b> にて一部の学生と交流の続き</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生3名がホテル近くに居住しているとのこと、交流終了後ホテルまで訪ねてくれた。ホテルから道路を挟んで <b>BEER GARDEN</b> があり、この3名と交流。</li> </ul> <p>この <b>BEER GARDEN</b> は私たちがホテルに到着当初より興味を持っていた場所であった。</p> <p>0:00 解散。</p>
11/7 (土)	ジャカルタ	備上バス	<p>8:30 <b>ORIA HOTEL</b> をチェックアウト</p> <p>8:48 モスク着 (外観のみ)</p> <p>9:00 モスク発</p> <p>9:13 チャイナタウンの市場着</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・市場を視察。日本では馴染みのないものとして食用ガエル屋 (主人がカエルをさばきながら陳列)、鶏の足だけの店など。野菜・魚介類が 30℃ほどの炎天下の中、氷などで冷やされることなく販売されていた。</li> </ul> <p>10:30 市場を出発</p> <p>10:48 ファタヒラ広場にある博物館を見学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・影絵に使う人形や、楽器などの展示。残念ながら説明表記がインドネシア語であるため理解できなかったがアムソリさんが説明してくださった。</li> </ul> <p>11:30 博物館を出発</p>

	ジャカルタ		12:02	レストランに到着
			12:50	昼食終了
			13:07	スラバヤ骨董品通り着 ・さまざまな骨董品を扱っている店が道路に沿って直線的に何件も連ねている通りを視察。
			13:43	スラバヤ骨董品通りを出発
			14:20	ブロック M 着 ・洋服、家電、ゲームなどのテナントが入るショッピングセンター。2階にはスーパーも入っている。
			17:02	ブロック M を出発 ・集合時間の 30 分くらい前からスコール発生。車がショッピングセンターより少し離れたところに停車していたため、濡れたまま戻る団員多数。
			17:22	レストラン着 ・最後の晚餐。団長より提案で小反省会を行う。
			18:15	食事終了
			18:30	レストランを出発
	スカルノ・ハッタ国際空港  (ジャカルタ) → 仁川空港 (韓国)	KE628 (大韓航空)	19:08	スカルノ・ハッタ国際空港に到着 ・6日は現地ガイドのアムソリさんの誕生日。団員からささやかなプレゼントを進呈。 ・出発ゲートがわからず、アムソリさんともども右往左往する。 ・荷物の整理、スーツケースへ荷物の入れ替えなど。
			19:45	搭乗チェックイン
			22:18	仁川空港へ向け離陸。
11/8 (日)	仁川空港 (韓国) → 新千歳空港		(日本時間) 6:45	仁川空港に到着 ・乗り継ぎのため、空港内にて待機
			9:30	搭乗ゲートにて集合 ・搭乗が予定より 15 分遅れる。
			10:35	新千歳空港へ向け離陸
			12:36	新千歳空港に到着
			13:15	新千歳空港内にて解散式



公益社団法人  
**北海道国際交流・協力総合センター**  
**HIECC/ハイエック**  
(旧 社団法人北方圏センター)

---

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center  
Hokkaido Government Annex West-7, North-3, Chuo-ku  
Sapporo, Hokkaido, 060-0003 JAPAN  
PHONE: +81 (11) 221-7840 FAX: +81 (11) 221-7845  
〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目(道庁別館12階)  
TEL: 011-221-7840 FAX: 011-221-7845  
URL: <http://www.hiecc.or.jp>  
E-mail: [hiecc@hiecc.or.jp](mailto:hiecc@hiecc.or.jp)